

平成滑稽（二）

有富洋二

平成の初頭、日本は昭和の痛みを受け継いではいたが、ジャパンマネーの行く手を遮るものなし、といい気になっていた。しかし、そのあげくのバブル崩壊と、それからの失われた二十年。一時は、『ジャパン・アズ・ナンバーワン』などと浮かれているうちに競争力は停滞し続け、周りの国々にどんどん追い越されて行った。

一方、この平成の三十年間、どれだけ多くの人達が十七音の俳句に心血を注いできたことだろう。そもそもどういう訳で、ときには夏炉冬扇とも言われる俳句作りに、こんなにもエネルギーを費やすことができたのだろうか。無常観や虚無感を抱えながら、必死にそれらからの救済を、俳句を通して無意識に探っていたのかも知れない。俯瞰すれば、滑稽俳句、平成滑稽がこの時代にこそ再生するタイミングであったとの思いも深まる。

平成の初頭、日本は昭和の痛みを受け継いではいたが、ジャパンマネーの行く手を遮るものなし、といい気になっていた。しかし、そのあげくのバブル崩壊と、それからの失われた二十年。一時は、『ジャパン・アズ・ナンバーワン』などと浮かれているうちに競争力は停滞し続け、周りの国々にどんどん追い越されて行った。

一方、この平成の三十年間、どれだけ多くの人達が十七音の俳句に心血を注いできたことだろう。そもそもどういう訳で、ときには夏炉冬扇とも言われる俳句作りに、こんなにもエネルギーを費やすことができたのだろうか。無常観や虚無感を抱えながら、必死にそれらからの救済を、俳句を通して無意識に探っていたのかも知れない。俯瞰すれば、滑稽俳句、平成滑稽がこの時代にこそ再生するタイミングであったとの思いも深まる。

かつて藤原清輔は『漢書』『史記』を繙いて俳諧と滑稽を結びつけた。以後この解釈が連綿と継承され、「俳諧とは滑稽である」という主張が固められていく。俳諧は、既成の感情を注ぎ込む和歌や連歌に真っ向から対峙しつつ、時には是を非に、非を是に、実を虚に、虚を実にしながら真実を焙り出すことで精神の解放感を得ようと試み、もがいた長い歴史をもつ。滑稽俳句も、このように積み木を崩しては形を変え、また積み上げるような作業を繰り返しながら延々と人々の心に真実を問いかけてきた。滑稽俳句とは、日常における破壊と創造の心ともいえる。

今、世界では国同士の対立が深刻化している。某大国では為政者の側近が次々に辞めていく。これらの由々しき事態に対して、教科書的な判断ではなかなか幸せな結末に届かない。トリックスターを待望してしまいかねない状況である。

古典に「帝王は賢者より賢い道化を好む」という言葉がある。ただの賢者よりも、賢い道化の方が有能だからである。生真面目なだけでは息が詰まってしまうが、賢い道化は、笑いに紛らせてそれとなく遠回しに諫める。相手を嬉しからせつつ、馬を鹿にしながらも、真実を説くことを忘れない。

平成の俳壇に滑稽俳句が登場したことは、必然であったように思う。滑稽俳句の心が、俳壇の苦境から新しい展開をみせたからである。平成に再興した滑稽俳句の心は、令和の時代も救いとなる可能性を持っている。滑稽俳句の眼目は、風呂敷を広げて言えば、世界の真実を笑いで指し示すことであり、固定観念から離れて自在の心を取り戻すことにある。

平成の終わりから、AIの驚異的な進化により、知的なホワイトカラーの雇用も大崩壊を起こしつつある。俳句も、AIにデータを学ばせば、自然随順の写生句やありふれた境涯述懐の句は作ることができるだろう。しかし、感性や創造性の缶詰である滑稽俳句は、脳に一千億の神経細胞を持つともいわれる人間の領域。滑稽俳人が持つ無限の創造力こそが世界の救済に寄与するやもしれぬ。

平成の駄目を見てをる雛かな

藤田湘子

百千鳥雌蕊雄蕊を囃すなり

飯田龍太

ねんごろに贗端溪を洗ひけり

草間時彦